

ネパールにおける児童労働と 子どもの権利状態について

沼口 博

はじめに

ネパールの教育状況や伝統的な教育についてはこれまでに著した論考で紹介してきたところであるが、子供たちが就学できない一番の原因は貧困や偏見、そして宗教的な考え方にも強く影響を受けていることを見てきた。本稿では貧困問題にかかわってネパールの児童労働問題について取り上げてみたい。というのもネパールでは貧困層に限らず一般的に家庭内労働を家族で分担することが慣わしとなっており、家族全員（乳幼児および老人など、働くことのできない人達を除く）で家庭生活を支えていくことが当たり前のこととされている。家族全員が家庭内労働を分担することにより生活や生産を支え合い、またそのために家族の結びつきは一層強いものになっている。

こうした家族関係を前提とした場合、家計を維持するために都市部や農村部の貧しい家庭に内職が導入され利用されることになる。そして、そのことが場合によっては児童労働の搾取になるケースについて紹介し、その解決への糸口について考察してみたい。

1. 近代化の過程における児童労働問題

児童労働の悲惨さについては、エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』によって描写されているだけでなく、わが国においても細井和喜蔵の『女工哀史』などに見られるように、不足する女工を補うために工場内に私立尋常小学校を設けて8,9歳の少女を募集していたほどである¹⁾。こうした女工が体も心も荒んでいく様は類似の作品にも詳しく描写されているところである。またジャック・ロンドンも『どん底の人びと』²⁾で20世紀初頭のイ

ギリスの貧困層について描写している。「いいかね、安い賃金で働いてこちらの仕事を奪った男の女房や子どもはどうなんだい？——ああいう連中の女房、子供も人間だ。奴らは自分の家族のことを心配し、飢えさせぬように頑張るのさ。だから賃金が安くていいと申し出て、そのあおりでこちらの仕事が奪われる。だが、彼らを責めても仕方がない。彼らとしてもやむをえずしていることだ。」と労働者の会話を紹介している。

近代国家が工業化していく過程で必然的に生産過程が近代化・合理化され熟練労働から不熟練あるいは未熟練労働に切り替えられ、子どもや女子の労働者が安く使われることになる。半面で熟練労働者は職場を奪われることになる。このようにして資本主義的な社会では労働者が搾取され非人間的な条件の中で子どもや婦人が労働を強制されることになる。とりわけ児童労働が搾取される状況についてはさまざまな著作で明らかにされている。

ところで、社会が近代化していく過程で児童労働の搾取は避けることのできない問題なのであろうか？イギリスにとどまらずイギリスを追いかけて近代化に突入した後発国はいずれの国においてもイギリス同様、労働者階級の窮状とならんで児童労働の悲惨な状況を経験してきた。こうした経験から、今日の発展途上国ないしは未開発国における児童労働の問題を回避する対策や政策を立案するのは難しいことなのであろうか。児童労働がこのように発展途上ないし開発に踏み出した国々で繰り返し発生するのはなぜなのか。こうした問いに、ネパールの児童労働問題を分析することをとおして、その原因を探って行こうとするのがこの本稿の課題である。

児童労働問題は貧困が最大の原因とされてきた。児童労働が搾取の対象とされるのであるが、児童労働は大人の労働者よりも低賃金で雇うことができるために重宝される。さらに労働現場の問題を取り上げて追求するほどの認識や行動力も発達していない。つまり使いやすく抵抗しないおとなしい労働者であるということにある。また手工業的な労働の現場では子どもの小さく柔らかな手はカーペットや絨毯織り、その他の手工芸品の製作に適しているとされている。

近代化に向かって歩み始めた国々ではいろいろな形態の児童労働が存在する。なぜ多様な児童労働が存在するのであろうか。ここでは児童労働を家族の生計を維持するために働くことだけに限定せず、子ども自らが生活するために働くことを含めて捉えたい。というのも売られてしまった子どもや、工場や雇用主のところから逃げ出した子どもたちがいろいろな形態で働いていることも児童労働の一種とみなしたいからである。

そもそも伝統的な社会の中では働くことのできる子どもを含めたすべての家族の構成員が分担された労働をとおして家族生活が営まれてきた。こうした家庭内労働の分担は家庭の生活や生産を支えるだけでなく、子どもたちにとっては生活や生産に必要なとされる知識や技術、技能を獲得してゆく貴重な経験の場でもあり、こうした経験をもとにして家庭生活や生産活動、そして地域の活動に慣れ親しんでいく場でもあった。

こうした知識や技術、技能の伝承という意味合いを含んだ家庭内労働の実態について把握してみたい。そこでネパールの二つの地域の家族をスケッチしてみることにした。

2. ラマさん一家の家庭内労働と児童労働の状況

家庭内労働の状況を探るために前回の稿で取り上げたネパール東部にあるカブレ県デウラリ郡アルボト村に住むラマさん一家の生活を以下に記録してみた。

{事例1}

カブレ県デウラリ郡アルボト村のラマさん家族の一日（2004年3月）

お父さん(カンチャ・ラマ)	お母さん(ボイモ・ラマ)	子ども(ラム、ジャムナ)
5:00 起床	5:00 起床	
↓ ヤギ小屋作り	牛、ヤギに餌やり	
↓	乳搾り	5:30 起床

6:00	お茶 (休憩)	6:00	お茶 (休憩)	6:00	
	↓ ヤギ小屋作り		草・しば刈り		草・しば刈り(女の子)
	↓		9:00 ご飯作り		牛・ヤギ追い(男の子)
10:00	朝ごはん	10:00	朝ごはん	10:00	朝ごはん
10:30	ヤギ小屋作り	10:30	後片付け		↓ 学校へ
	↓		11:00 畑仕事		↓
	↓		↓種まき、苗植え		↓
	↓		↓野菜の収穫など		↓
	↓		↓洗濯・ムシロ編み		↓
14:00	お茶 (休憩)	14:00	お茶 (休憩)		↓
	↓ヤギ小屋作り	15:00	畑仕事		↓
	↓		↓		↓
16:00		16:00	ムシロ編み		↓
	↓畑仕事(耕作)		↓	16:30	帰宅(学校から)
	↓		↓洗濯物の取込み	17:00	牛・ヤギ追い
	↓	18:00	夕食作り	18:00	夕食の手伝い
19:00	夕食	19:00	夕食	19:00	夕食
	↓		後片付け		後片付けの手伝い
20:00	就寝	20:30	就寝	20:30	就寝

以上のようにラマさん一家は早朝から夜まで、子どもたちを含めた一家総出で家庭の仕事をこなしている。また上記のスケジュールからも読み取ることができると思われるが男の仕事と女の仕事に分かれている。以下に簡単に分類してみたい。

[男の仕事]

畑の耕作(水牛を使って)
屋根葺き・小屋作り

[女の仕事]

家畜の世話(草刈り、餌やり、乳搾り)
家事(炊事:後片付け)

儀式（冠婚葬祭など）	洗濯、掃除、ムシロ編み、繕い物、薪とり
SABA（隣組の寄合い：月に一回）	畑仕事（種まき、手入れ、日々の収穫＝野菜類）
家計の維持（出稼ぎなど）	儀式の手伝い（炊き出し、お茶組など）

〔子どもの仕事〕

男の子は父親がやっている仕事を、女の子は母親がやっている仕事を手伝う。特に子どもの仕事として、男の子は家畜を小屋から出して野良に放牧したり、夕方には小屋に連れ戻すのが役割になっていた。女の子は家畜の餌の草刈りに母親と一緒に出かけたり、炊事の場合は水汲みやかまどの管理、小さい子どもの面倒を見ることやムシロ編みの手伝いも行っていった。

もちろん、子どもたちは遊ぶことにも興味があるので時々、仕事の手を休めて、あるいは仕事を放り出して遊びに夢中になって親からしかられる場面も見受けられた。しかし、基本的に子どもたちは親の仕事を手伝うのが当然のことになっている。そして、こうした仕事や手伝いをサボるのが上手な子と下手な子がいることも興味深かった。また観察をしていて特に女の子に対しては母親からの家事労働（炊事や掃除、ムシロ編みなど）の要求は強くまた厳しく、日常的な経験を通して生活に必要な技術を早く身に付けさせなければならないという社会的な強制力も（通常の結婚適齢期は農村では13歳から15歳といわれている）大きく影響しているようである。

以上のように、子どもたちは父親や母親の仕事を手伝いながら将来の生活や生産に向かって知識や技術・技能を準備しているようである。生活や生産活動をとおしての広い意味での教育が行われている。

3. ラマさん一家の家庭経済

このラマさん一家の家庭経済はお父さんのカンチャさんが不定期ではあるがヒマラヤ登山のトレッキングの手伝いや外国からの観光客の案内の手伝いなどに出かけることで貴重な現金収入が入り、家庭内労働ではまかなうこと

ができないさまざまな物資や材料などの購入資金に当てられていた。こうした現金収入はネパールではヒマラヤトレッキングの手伝いだけではなく、カトマンズや都市部に出稼ぎに行くこと、そして場合によってはゴルカ兵（地域的、部族的に限定されるが）による傭兵で稼ぐ人たちもいる。

ラマさん一家の家庭経済について概観すると以下のようなになる。

収穫（1年間）		購入物資（生活に必要な）
トウモロコシ	2000kg～3000kg	砂糖、塩、油、調味料、衣服、ケロシン（灯油）
麦	500kg	文具など
米	500kg	
		材料代
所有する家畜		ヤギ小屋の材料代、屋根など家の補習材料代
水牛	2頭	
ヤギ	2頭（ツガイ）＋子ヤギ	設備
鶏	2羽（ツガイ）＋ひよこ	バイオガス発生装置、太陽電池パネル、瓦屋根

畑 20枚（急傾斜地で棚田状になっている）

上述のようにラマさん一家はガイドの手伝いなどで現金収入が入るために家の屋根が瓦葺になっていたり、太陽電池パネルで夜間の照明（以前はケロシンによるランプ生活だった）を導入したり、家畜の糞尿をためてガスを発生させる装置を設けたりというように、周りの家庭と比べる近代的な設備が整えられていた。こうした設備を購入するには現金収入が欠かせないが、伝統的な農業と牧畜だけに頼る生活ではこうした購入資金を蓄えるのは容易ではない。

ラマさんによるとトレッキングや観光ガイドの手伝いで一カ月に5000Rs～10000Rs（ルピー）の現金収入があるということだった。外国人相手のこうしたトレッキングや観光ガイドは高収入が得られるということで、一般の

出稼ぎなどの収入では得られない金額だという。このラマさん一家は、そうした意味ではこの地域の中では裕福な生活を送っている家庭になる。

ところで子どもに対する期待や希望について聞いたところ以下のようなことを話してくれた。

男の子：勉強をして高校まで進みSLC（中等教育修了証）を取得、教師になってくれるのが楽しみ

女の子：いい結婚をして欲しい。そのためにはまじめな性格を持ち続けて欲しい

{事例2}

タライ県チトワン郡バドラハニ村のシェレスタさん（2004年3月）

このシェレスタさんはチトワンには数少ないネワール族で50年ほど前にここに引っ越してきたということであった。村で商店を開いていたが昨年春の洪水で店も家も流されてしまい、今は近くの国立ゾウ飼育センターに手伝い（朝10時から夕方5時まで）に行き生活費を稼いでいるということであった。

シェレスタさん一家も商店（洪水で流出）、家、畑、そして水牛2頭、ヤギ2頭、鶏2羽（つがい）が財産で、ここ2～3年のうちに電気が敷設され、電気を使った生活に変わり、現金収入がある家庭ではテレビが購入されていた。もちろんシェレスタさんのところにはテレビがあった。

シェレスタさん一家の生活はラマさん一家と同様、朝は5時半ころ起床し、夜は8時半から9時ころに就寝するということであった。朝は家畜のえさとなる草取りと家畜の世話、そして家畜を放牧した後は朝食、その後お父さんはゾウの飼育センターに手伝いにお母さんは掃除や洗濯など家事に従事しており、子どもたちはそれぞれ学校に通っていた。

特に長女のシッタは学校から帰った後、家庭内労働として家の壁塗りに専念していた。お父さんは仕事（手伝い）から帰ってきたあと、屋根を葺き直す作業をしており、一番下の男の子に代わって女の子3人の長女であるシッ

タが手伝いをしていた。

シェレスタさんの子どもたちに対する希望を聞いたところ、男の子も女の子も平等に教育を受けさせたい。また中等教育（10学年）までは修了して欲しいということであった。そのほかに、昨年春の洪水で流されてしまったお店を早く再開したいということであったが、そのためには資金が必要で、50000Rs～60000Rsがかかるということであった。ゾウの飼育センターの日給が150Rsということなので全額を貯めたとしても一ヶ月に3750Rsほどしか貯めることができず、お店を再開するには時間がかかなり必要だということであった。また、昨年同様洪水が再び起こる可能性もあるので、安全な地域に転居することも考えているということであった。

ここチトワン地域はインドと国境を接している地域でもあり、インド人とネパール人はビザなしで国境を行き来する関係にあり、商工業も盛んな地域である。そのために人々の移動は旺盛に行われているようで、このシェレスタ一家も安全に商売ができる地域を探しているようであった。

4. ネパールの児童労働の現状

ところで子どもたちが家庭の中で働くことは当然のこととして受け入れられているネパールではあるが、家庭外で働く子どもたちが約260万人に上るとされている。ネパールでは18歳以下の人口が全人口の50.7%を占め、その中で5歳から18歳人口の41.7%が児童労働者として位置づけられている。これらの児童労働は家内制手工業や零細、小規模の工場などで行われていることが多く、深刻な健康被害や不就学状況が蔓延していることが指摘されている³⁾。

ネパールのNGO団体の一つであるCWIN（Child Workers in Nepal Concerned Centre）の調査によると特にネパール南部のタライ地方で児童労働の割合が最も高くなっており、家庭外での労働だけではなく家庭内の児童労働（家庭内労働）にも問題があるとして1999年にいくつかの地域を特定して調査を実施した。

タライ地方はインドと国境を接しており、インド系の企業が人件費の安いネパール人労働者を雇用するために工場を設置している地域でもある。また伝統的に家族内労働が行われている地域でもあり、こうした状況を踏まえてタバコ産業がいくつかのタバコ製造にかかわる工程を家庭の内職として請負に出している地域でもある。こうした家庭内労働における児童労働の実情の把握は大変に難しく、実際に個々の家庭に入って調査をする以外に子どもたちの状況を把握する手段はないということで1999年からCWINが調査を実施。

その結果、このタライ地方の三つの地域での調査により家庭内労働としての児童労働がタバコの製造を請け負うというかたちで、内職として行われていることが明らかになった。この地域では男女の識字率に大きな相違があり6歳以上14歳までは、男子が49.8%に対し女子の識字率は15.6%、さらに15歳以上では男子46%に対し女子はわずか9.2%という状況にある⁴⁾。

この地域でタバコ産業の内職が家庭内労働として普及している理由は「他に仕事がないから」が82.8%、「自由時間の有効利用」というものが12.7%であった⁵⁾。この地域の半数以上の家庭では(54.4%)十分な食料があるのは一ヵ月以下であり、およそ四分の三は八ヶ月以下の食料しか調達できないという極貧状況に置かれている。そのためにタバコ工場主から借金をしている家庭もあり、特にBARA地区では調査対象となった31.6%の家庭が借金をしていた⁶⁾。

またタバコ産業による内職を請け負っている子どもたちの年齢を見ると5歳から9歳までが31.7%、10歳から14歳までが56.9%、15歳から18歳までが48.2%となっており、特に女子の場合に多い(5歳から9歳で38.9%、10歳から14歳で67.3%、15歳から18歳では76.7%にも及んでいる)ことが見て取れる⁷⁾このことは家庭内労働に従事する時間を見ても明らかで、5-9歳で平均して1日に4.1時間、10-14歳で5.2時間、15-18歳で6.3時間の労働をしているが、女子を見るとそれぞれ4.3時間、5.4時間、6.3時間というように平均より多くなっている⁸⁾。またこうした労働により学校に通うことができなくなっており、タバコ製造に関わる内職を手伝う子どもたちの就学率は

以下のように極めて低くなっている。5歳から9歳まで20.5%、10歳から14歳まで37.1%、15歳から18歳まで10.1%⁹⁾となっており、特に女子では5-9が14.5%、10-14で22.4%、15-18では0.0%と極めて低い就学率にとどまっている。さらにこれらの子どもたちが在籍している学年は5歳から9歳の平均が1.6学年、10歳から14歳が3.6学年、15歳から18歳で7.7学年となっており、学力的に十分な学習が行われていないことを示している¹⁰⁾。そのためにドロップアウトした子どもたちも多くなっている。またドロップアウトの理由についてはタバコ製造のために学校に行けないだけでなく、その理由は多岐にわたっている。学費が払えない32.1%、家庭内労働のため19.6%、両親が学校に行くことを望まないため12.5%、女の子だから10.7%、学校に行きたくない10.7%、タバコ製造のため8.9%、結婚のため5.4%（先に見たようにネパールでは結婚適齢期が13歳から15歳となっている）という理由が挙げられている。

またタバコ製造により健康状態が良くないという子どもたちも多く、男子で86.6%、女子で86.4%の子どもたちが時々病気になると答えている¹¹⁾。その内訳を見ると、頭痛29.6%、胸の痛み10.4%、咳14.5%、胃痛17.0%、目痛み9.7%、手足の痛み4.4%、熱14.5%というように長時間土間に座って乾燥したタバコの葉を扱うことによりニコチンやタールといったタバコに含まれる成分や塵芥、埃などによる影響が出ているものと思われる。また、こうしたタバコ製造からくる症状に対して治療を受けている子どもたちは男の子で94.4%、女の子で81.8%となっており、その内訳は病院28.1%、保健所11.2%、個人医51.4%、保健婦5.4%、伝統的民間治療師8.3%となっており、公的な医療機関での治療は44.7%にとどまっている¹²⁾。

5. 終わりに

CWINはこうした児童労働を直ちに禁止することについては慎重な対応を求めている。というのも児童労働の禁止は家庭経済の破綻を招きかねないからである。タバコ製造に関わる収入の三分の一以上が児童労働によるものと

される状況の中で、CWINは学校への就学を促すことと健康を維持できるプログラムを実施することを提案している。具体的には学校給食の実施、保健・衛生の指導と管理、そして就学に関わる制服や間接的な費用など家計を脅かす出費に対する支援である。もちろん長期的に見れば家計をまかなうだけの収入が得られるような労働の機会の保障ということも指摘している¹³⁾。

開発途上にあるネパールでは近代的産業に従事する労働機会は少なく、いまだに伝統的産業に従事して生計を立てざるを得ない状況にある。ラマさんのように海外からの観光客や登山客を案内する仕事に従事することができればかなり高めの報酬を稼ぐことができるが、伝統産業に毛の生えたような仕事では報酬はほんのわずかでしかない。近代産業の普及と産業構造の転換、それに対応する労働力の育成と教育の普及がネパールの今日の課題といえよう。しかし、歴史は皮肉にも貧富の差の拡大を繰り返しているようである。外国企業や外国人と関わる近代的な産業に従事するためには英語が話せることが必要で、英語教育を重視した私立学校がカトマンズ市内にたくさん創られ、家計に余裕のある家庭の子どもがそうした学校に通っている。その意味からするなら公的な部門の一層の拡大と普及が社会的、政治的な課題となっていると思われる。児童労働の消滅はその結果生じてくるものではなかろうか。

注

- 1) 細井和喜蔵『女工哀史』岩波文庫 1954年 p.5～6
- 2) ジャック・ロンドン『どん底の人びと』岩波文庫 1995年 p.212
- 3) CWIN (Child Workers in Nepal Concerned Centre) 『Child Labour in Bidi Industries in Nepal』2001年 p.1
- 4) 同上書 p.13 Table3.3より
- 5) 同上書 p.17 Table4.2より
- 6) 同上書 p.18 Table4.4より
- 7) 同上書 p.20 Table4.5より

- 8) 同上書 p.23 Table4.7より
- 9) 同上書 p.30 Table5.1より
- 10) 同上書 p.32 Table5.2より
- 11) 同上書 p.43 Table6.2より
- 12) 同上書 p.46 Table6.4より
- 13) 同上書 p.49~50